ノーサイド

北原　巖男

点と線　そしてチムグクル

作家松本清張さんの著名な推理小説「点と線」をイメージされた方には、ごめんなさい。

いずれも沖縄に住んでいたときに、沖縄の方から言われた言葉です。

今年も6月23日そして6月30日が目前に迫り、改めて思い出しています。

6月23日は、74年前、約3か月に及んだ沖縄戦における日本軍の組織的戦闘が終わったとされる日。日米合わせて20万人を超える多くの皆さんが戦禍に倒れました。「鉄の暴風」や玉砕、壕の中での集団自決など、悲惨を極めた我が国唯一の地上戦の結末です。

現在は「沖縄慰霊の日」として、沖縄県内では平和行進や様々な集いが開かれ、南部の糸満市摩文仁の平和記念公園で行われる「沖縄全戦没者追悼式」には、毎年首相や防衛大臣等も参列しています。ただここ数年来この日の報道は、政府が進める世界一危険な普天間飛行場の一刻も早い辺野古移設工事の進捗状況とこれに反対する活動の様子が大きく取り上げられています。

他方、6月30日は1959年に突如起きた大惨事の日。当時アメリカの施政権下にあった沖縄県の石川市（現うるま市）の宮森小学校に米軍嘉手納基地所属のF100D戦闘機が墜落したのです。整備不良が原因とのこと。

巻き込まれた児童12名（うち1名は後遺症で死亡）、一般住民6名の合計18名が死亡。さらに重軽傷を負った児童の数は156名にのぼり、一般住民も54名が負傷しました。

このような悲惨な事故を二度と起こしてはならない、再発防止の徹底が強く叫ばれました。しかしその後も様々な墜落事故は留まるところを知らず、犠牲者や負傷者が出ていることは周知のとおりです。

今年は、この宮森小学校墜落事故からちょうど60年を迎えます。この日、作家武者小路実篤氏が描かれた「仲良し地蔵」の慰霊碑の前では、いつものように宮森小学校の児童の皆さんや亡くなられた生徒と同級生だった方々が参列して、しめやかに追悼式が行われることでしょう。なお、事故の写真や遺品類を紹介する企画展が、うるま市立石川歴史民俗資料館で7月31日まで開催されています。

戦後生まれで、米軍基地の無い長野県に生まれ育った私にとっての6月23日と6月30日。リアリティを以て捉え得ないままに沖縄に参りました。

しかし、そこで沖縄の歴史や厳しさ・不確実性を増す国際軍事情勢、過重な基地負担の実態の一端を皮膚感覚で体感するに至ったとき、この両日が、極めて今日的な警鐘を私たちに懸命に鳴らし続けて来ていることに気づかされました。今頃気づいたのか、と呆れられるかもしれませんが、初めて心底から思いました。

そんなとき、対面した沖縄の方から言われました。

「沖縄の皆さんに寄り添って、との言葉をよく耳にします。沖縄の基地問題には、長い歴史があります。沖縄県は勿論47都道府県の一つですが、過去の歴史から、46＋1といった感覚がどこかにあることも否定は出来ません。基地問題については、あたかも外交交渉を行うが如く、丁寧に丁寧に進めて行っていただきたいと思うのです。そして例えば基地に係わる事件や事故などが起きたとき、その事象についてのみ焦点を当てて考える、いわば「点」として捉えるのではなく、過去の事件や事故などをも含めた基地をめぐる長い歴史の「線上の点」として捉えていただきたいのです。そう捉えることによって、対応の仕方なども変わって来る可能性があるのではないかと思うのです。そして私たちは、何よりもチムグクル（肝心）を大切にしたい、そう思っています」

（お詫び）私はチムグクルを的確に表現することが出来ません。読者の皆さんには、各人でそれぞれに感じていただければ幸いです。

北原　巖男
（きたはらいわお）
元防衛施設庁長官。元東ティモール大使。現（一社）日本東ティモール協会会長。（公社）隊友会理事